



地域日本語支援ニュース こだま 第410号

2021.10.14



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部：<https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

====目次=====

1■日本で育つ：神奈川県から■

一人一人の人生を応援したい！～外国につながる高校生の実情～
川崎 範子

2■進学進路ガイダンス情報（2021年）■

=====

1■日本で育つ：神奈川県から■

令和2年末の在留外国人数は288万7,116人。前年より減少したものの、コロナが収束すれば、再び増えていくことが予測されます。外国人が住みやすい日本となるために、早急な対応が求められていることの一つが、外国人児童生徒の教育環境の改善です。特に高校生については、日本人高校生との間に顕著な教育格差があると言われています。川崎範子さんは、10年以上にわたり神奈川県内の高校で外国籍生徒に日本語を教えてきました。川崎さんに、生徒たちの人生を応援する高校教師としての日々を語っていただきました。

.....

一人一人の人生を応援したい！
～外国につながる高校生の実情～

認定 NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ

多文化教育コーディネーター
AJALT 所属日本語教師
川崎 範子

◆難しい「高校の日本語」

私は神奈川県内の高校で、外国につながる生徒へ日本語を教えながら、学校生活を支援しています。高校には「留学生」ではない、来日まもない生徒が相当数います。神奈川県は高校入試に特別入学枠があり、在日3年以内（来年度より6年以内）の生徒が入学できる高校が10数校あります。

高校の教科の日本語は難しいです。特に漢字は、非漢字圏の子にとって苦手な音読み熟語のオンパレードです。彼らは、教科書に書いてあることを、入学時まったく読み取れず、勉強して少しわかるようになり、でもやはりあまりわからないまま卒業していくのが実情です。そのほかにも生活のための日本語が必要になります。

◆働きながら学ぶ生徒たち

定時制高校での一コマです。

ある日の授業で、私は中国人のビンさん（仮名）の顔が少し白いような気がして、目を落とすと、手が包帯でぐるぐる巻きの状態でした。いったいどうしたのか聞いてみると、ビンさんは昼間お母さんと一緒に工場に勤めているのですが、今日はお母さんが休んだため、代わりに冷凍の魚を切って、滑って指を大きく切ってしまったとのこと。なんと6針も縫って、それでも学校に間に合うように急いで来たと言います。驚きました。なんてことでしょう。でも、彼女は「だいじょうぶ。ちゃんと今日の給料もらえた。」と痛さをがまんしてほほ笑んでいました。そういう問題ではないでしょう。日本語がまだわからない16歳やそこらの女の子にこんな痛い思いをさせて。それに、労災とか補償の説明はなかったのかと、涙が出ました。

フィリピン人のアンさん（仮名）は20才でシングルマザー。母親が日本にいたので来日しましたが、母国に幼なじみのボーイフレンドがおり、将来彼との新しい家庭を夢見ていました。でも、突然、彼が母国で死亡。驚いたアンさんは、お金がないので急いでクレジットカードを作って飛行機代を用意し、お葬式に飛んで帰りました。しかも、クレジットカードを作るときに、きれいだか

らとゴールドカードにしていました。もしかしたら、きれいなもので心を支えたかったのかもしれませんが。日本語が難しく規定がよく読めなかったこともあります。今の日本では、クレジットカードはスマホを使って、簡単に取れてしまうのです。こんなところにも、外国につながる生徒たちが陥る落とし穴があります。日本に戻ってからのアンさんは、飛行機代を返すために、某物流センターで土日も夜勤をしながら、疲れた顔で学校に来る毎日。私はかける言葉がなく、なるべく笑顔でいつものように一緒に勉強していました。

◆家庭に居場所がない生徒も

昼間に通学している生徒も、重い境遇を背負っていることが珍しくありません。

生徒の家庭環境は複雑です。母親が先に日本に来て働き、日本人と再婚してから、母国に残している子どもたちを教育のために呼び寄せるケースが多くあります。日本人と結婚すると在留資格が安定するという面もあるからだと思われます。母親と再婚相手との間に子どもがいることも多く、来日した生徒は家庭での居場所がないことに苦しみます。バイトや少ない同国人の友だちに救いを求め、ときには家出をする生徒もいます。「先生、部屋ありませんか。お義父さんは私のことがきらい。だから、家を出たい。」と言われても、助けにならず申し訳ないと思ったこともありました。こんな生徒が、宿題をして来なくても、責めることはできません。「今日もよく学校に来られたね、えらいね」という気持ちです。

◆退学する生徒は日本人の7倍以上

生徒たちの母親は病気になったり離婚したりすることも多く、母親より彼らのほうが日本語がわかるので、親のために役所や病院に付き添い、学校を休みます。また、日本生まれ日本育ちであっても、家の中で漢字を使わない国の生徒はだんだん授業についていけなくなり、自信がなくなって、いいかげんになったり、友だち関係が狭まったりします。公立高校を退学する外国につながる生徒は、実に日本人の7倍以上います。（*下記資料参照）

◆一人一人をしっかりと育てて社会を変える

2019年文科省調査で、義務教育相当年齢の外国人児童生徒15.8%約2万人が不就学の可能性があることが判明しました。また、高校在籍者の数は、中学

在籍者の数の6割ほどにしかありません。(*)単純に計算すると、高校生の年齢であっても高校に通っている生徒は半分です。ですから、幾多の困難を越えて、高校に通ってきている彼らには、ぜひ卒業してもらいたいと思っています。現在、日本の高校進学率は99パーセントで、高校を卒業しないと、職業選択の幅はせまく、生涯賃金も少なくなり、貧困に陥りがちです。外国につながる若者にとって、「高卒」でないことはなおさら不利です。生きるに困って、ことばが理解できないまま犯罪に巻き込まれるおそれもあるでしょう。それは彼らの人生のみならず、日本にとっても大きな損失となります。

一方、がんばって一人前になっていく卒業生もいます。一人の生徒の人生が良い方向に変われば、そのまわりの家族、親戚、友だち、また、そのあとに続く若者、と多くの人々の人生が同じように変わっていきます。一人一人の高校生をしっかりと育てていけば、今後50年の日本社会が大きく良い方向に向かうのではないのでしょうか。

前述のアンさんですが、その後もお母さんが離婚するなど苦労続きでしたが、勉強しました。日本語能力試験はN3でしたが、TOEICが800点ぐらいとれたのです。実力でとった800点が、アンさんの存在を示しているようで、とても嬉しかったです。まわりの先生方のおかげで、この3月無事卒業して会社に就職できました。子どもはちょうど小学校入学です。「学校のお便り読めるかな」と少し不安げでしたが、笑顔が可愛い彼女が周囲の人たちに助けてもらえることを願っています。

◆人生を応援する仕事

今、外国につながる若者への資金と人力の投資が必要です。なかでも日本語教育は喫緊の課題です。私も、なんとか一人一人に特効薬のような教え方はないものかと日々考えてしまいます。

様々な生徒がいますが、一生に一回の高校生活をあとで振り返ったとき「なかなかよかったな」と思ってくれば、と思っています。日本語を教えるにあたっては背景の生活を知ることが必須、と考える今となっては、なんだか人生を応援している仕事のような気がします。

*「提言 外国人の子どもの教育を受ける権利と修学の保障—公立高校の『入口』から『出口』まで」

(令和2年8月11日 日本学術会議 地域研究委員会 多文化共生分科会)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t289-4.pdf>
